

月に一度、仏壇の母に花を供える役は家族の中で私になっていた。る。

県外で生活していた時は、盆や正月など帰省のたびに花を供えていた。こちらへ戻ってからも「花は姉ちゃんね」といつのまにやら私に決まり、そのままとなっていた。

どんな花を買うか、小菊以外は花屋で決める。母が、ピンク色が好きだったのでピンク色の花は必ず入れるようにしている。また、小ぶりの花が好きだったので、一本の茎にたくさんの花をつけたものも入れる。花を選んでいるとき、私は母の笑顔を思い出す。

買った花は、花瓶の大きさに合わせて茎や葉を落とし、花の向きを整えて生けて、仏壇に供える。供えたらそのまま手を合わせる。

先日、いつものように私はひと月の間にあつたことを思い出しながら、ぶつぶつと語りかけていた。ふと、母の笑顔を思い浮かべて語っていると、ひと月の間にあつた多くの事柄のうち、楽しかったことや嬉しかったことばかりを話していることに気付いた。本当は、しんどかったことや腹の立ったこともあったはずであるのに、だ。しかも、思い出したしんどかった

笑顔のささえ

ことや腹の立ったことは、もう語りかけたい、聞いてほしい、とは思わなくなっている。母の笑顔を見ていると、もう、どうでもよかつたことのように思える。私は、そんな自分に思わず笑ってしまつた。

以前もたくさんのお出来事を笑顔で聞いてもらった。聞いてもらっているうちに、しんどい気持ちも腹の立つ気持ちも消えていった。今も、その笑顔を思うと負の感情が落ち着いていく。結局ずつと、助けられている。

月に一度、私は仏壇に花を供える。仏壇の母に語り、心を癒し、また次のひと月をがんばっていく。



*このシリーズはあなたとあなたの周りにいる人の間に温かなつながりが生まれることを願い、人権について考えるきっかけになることを目的としています。

■問い合わせ

人権啓発広報委員会

☎ 880・6569